

2020年度活動報告 CJP授業 : 会話・聴解4

著者	山口 貴史
雑誌名	関西学院大学日本語教育センター紀要
号	10
ページ	17-18
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029323

2020 年度活動報告 CJP 授業：会話・聴解 4

山口 貴史（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

本授業は日本語の必須科目であり、90 分の授業で週 2 回、月曜日と金曜日に開講されている。『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級 1』（以下、『生中継』）、および『わたしのほんご 初級から話せるわたしの気持ち・わたしの考え』（以下、『わたしのほんご』）を使用し、カジュアル・フォーマルスピーチなど、会話相手に適した話し方や使い分けができること、事実とその感想をわかりやすく伝えられること、日常生活に必要な情報が聞き取れることを目標に、聞き取りや会話、また独話の活動を行っている。2020 年度春学期は 3 クラス開講され、1・2 クラスの履修者は各 2 名、3 クラスは 3 名であった。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、Zoom というビデオカメラ機能を用いて、同時双方向型で行われた。

2. 授業内容

本授業は、リスニング、ロールプレイ、モノローグの 3 つの段階を 3 コマの授業に分けた形で構成されている。また、授業に参加するにあたり、教科書の未習語彙や表現は予習しておくように指示し、より効果的に各活動が行えるようにしている。

1 コマ目のリスニングの授業は、スピーチ、スキヤニング、スキミング活動で構成されている。まず、ウォームアップとして 1 分間程度のスピーチとその内容に関する質疑応答をペアまたはグループで行った。スピーチの際、文法ではなく、まとまりのある文章でわかりやすく話すことを意識させた。また、質疑応答により、内容補足や改善点などへの気づきに繋がった。毎回 2・3 名に全体に対してもスピーチを行ってもらい、コメントやフィードバックの共有の機会を設けた。徐々に時間を長くする、ペアでテーマを変えるなど難易度の調節も行い、更なる上達を図った。

その後のスキヤニング活動では、『生中継』の会話部分の聞き取り、内容に関する質問の作成、その質問を用いてのペアでの質疑応答による内容確認、教員の質問への解答などを通じて、会話のポイント理解と重要表現の確認を行い、聴解力だけでなく、会話の場面や状況ごとで使用される語彙・表現力の向上にも繋がった。

最後にスキミング活動としてディクトグロスを行い、異なった視点からの会話の再構成をさせることにより、概要理解力を養えるようにした。具体的な活動内容としては、『生中継』の会話を聞いてメモを取り、そのメモをもとにペアで内容確認と情報共有を行い、メモと共有した情報をもとに聞いた会話の内容を書き起こすというものである。書き起こしたものは宿題として提出させ、個人と全体にフィードバックを行い、各学生

の改善点への意識づけを促すだけでなく、内容説明の際の適切な表現や文章の構成の仕方なども全体で共有し確認させた。

2コマ目のロールプレイの授業では、まずロールプレイの一部をウォームアップとして行い、現段階でどの程度の会話ができるのか学生に把握してもらった。次に、1コマ目で用いた会話などを例とし、状況・流れ・機能・表現などの分析を行い、全体の構成を確認させた。それにより、ロールプレイの内容と表現の再確認、及び活動の円滑化を図った。その後、学生の実体験なども踏まえて話し合いながら、取り扱う場面のブレインストーミングをさせ、ロールプレイの実用性と会話状況を理解させた上で、活動を行った。ロールプレイは、カジュアル・フォーマルの両スタイルを扱い、立場の違いによる話し方への対応とその認識ができるようにした。最後に、ウォームアップ時と最後に行ったロールプレイとを比較し、上達度や改善点などについて、コメント共有を行った。

3コマ目のモノログの授業では、まず『わたしのほんご』のモデルストーリーを何度か聞き、その内容をできる限り学生に再生させた。再生が難しいものに関しては、後ほどスクリプトで確認した。トピックに関連したモデルストーリーを何度も繰り返し聞き、模倣することにより、話し方のパターンを理解できるように促した。その後、モデルストーリーの構成を確認し、それをもとに自分のストーリーを構築できるようにした。ペアやクラス全体でストーリーの共有や質疑応答も行い、更に内容を深められるようにした。また、宿題としてそのストーリーを文章化させ、内容や文章の流れ、表現を確認し、よりわかりやすく伝えられるようにフィードバックを行った。

3. 今後の課題

オンライン化に伴い、Zoomでの授業となったことにより、画面共有の機会が増え、学生への指示が素早く行えるようになった。少人数であったこともあり、学生一人ひとりへの対応にゆとりをもって行えた。また、対面で問題となっていた会話部分や他の学生の発言の聞き取りにくさも、音量調節が可能になったことで、ある程度解消されたようである。実際に対面時より会話の内容をよく聞き取れていたことが多かった。更に、遠隔授業かつ少人数であったことが発話時の圧力軽減に繋がったのか、リラックスした状態で授業活動に参加できていたようで、発言や質問を積極的に行う姿勢が見受けられた。授業アンケートにおいても、学生への対応や授業活動に関しては高評価であった。

一方で、互いのネット環境により、マイクやオーディオの音声の問題にとどまらず、授業自体の参加が困難になることがあった。また、少人数であったため、学生間のやり取りの減少や、活動相手の限定など、コミュニケーション面での問題も生じた。今後も授業のオンライン化が予想されるが、授業環境においては、他のツールやアプリも使用するなど、授業を正常に行える環境を整えておく必要があるだろう。また、他クラスと合同の授業を行うことも視野に入れておくなど、少人数化への対策も考慮しておけば、オンラインという状況を効果的に活かした授業が提供できると思われる。